Research Monograph Series

力の生成論

——必然性から偶然性への位相変換と、生成の位相存在論——

A Generative Theory of Force
Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 28, 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka　(bigakusha-haha)
Version 1.0 July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

A Generative Theory of Force:
Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 28, 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、「力」を既存の物理学的、心理学的、社会学的概念から区別し、生成の位相存在論における中心概念として再定義することにある。本論文において力とは、主体があらかじめ所有する能力やエネルギーではなく、未来が現在に作用し、言語、意味、身体、行為および現実の接続を通じて生成される存在論的力動である。

近代社会は、国家、教育、労働、市場、制度、評価、証明、科学、宗教などの一般普遍的構造を通じて、人間に未来像と行為の方向性を与えてきた。しかし現代において、これらの一般普遍性は制度として存続しながら、人間の内部に根源的な力動を生成する能力を失いつつある。人間は日常的に身体を動かし、労働し、移動し、情報を処理しているにもかかわらず、「生きている」という実感を持つことができない。この状態は、運動が存在しても存在生成が生じない状態、すなわち行為が必然的反復へと閉じられた状態として理解できる。

本論文は、この状態を「力を失った一般普遍性」と呼ぶ。その特徴は、未来が未知の可能性として開かれるのではなく、既存の構造によってあらかじめ予測、計算、評価、配分された将来へと還元される点にある。ここでは未来は存在しているように見えるが、実際には現在の延長として先取りされている。したがって意味、ナラティブ、態度および行為は、その根源的力動を失う。

これに対し、本論文は、自己による個別具体的な言葉と実践を通じて、必然性の内部に偶然性を生成する位相変換を提起する。言葉は未来を指示するだけではなく、まだ存在しない未来を構造化し、その未来を現在へ作用させる。意味とは、この未来の作用によって現在に生じる方向性であり、ナラティブとは未来へのベクトルを生成する言語的構造である。さらに、そのベクトルが身体に保持された状態が態度であり、言語的未来が身体的行為を通じて現実と接続される過程が現実接地である。

以上から本論文は、力を「未来が現在に畳み込まれ、言語によって方向づけられ、身体的実践を通じて現実へ接地することによって生成される存在論的ベクトル」と定義する。そして、芸術を、既存の必然的構造の内部に偶然的接続可能性を生成し、人間が自らの知らない自己および未確定な未来へ接続する条件を設計する実践として位置づける。

キーワード

生成の位相存在論；力；力動；一般普遍性；個別具体的普遍性；未来；ナラティブ；言語デリバティブ；必然性；偶然性；位相変換；現実接地；態度；芸術

目次

Contents

第0章 方法論的序論.....1
第1章 力を失った一般普遍性.....2
第2章 必然性としての閉じた位相.....4
第3章 未来、言葉、意味.....6
第4章 力、ベクトル、態度、位相.....8
第5章 根源的力動の喪失.....10
第6章 必然性から偶然性への位相変換.....11
第7章 現実接地と力の生成.....13
第8章 芸術と力の生成.....14
第9章 人工知能と言語デリバティブ空間.....16
第10章 生成の位相存在論における力の体系.....17
結論.....19
参考文献.....20
方法論的声明.....22

第0章　方法論的序論

本論文において扱う「力」は、ニュートン力学における力、生命科学における生命力、心理学における意欲、社会学における権力、あるいは哲学史における意志とは異なる。もちろん、それらの概念と部分的に交差するが、本論文が対象とするのは、存在が生成される際に生じる方向性、緊張、接続可能性、および未来への開放性としての力である。

生成の位相存在論は、存在を固定的な実体としてではなく、自己、他者、環境、自然、制度、言語、身体および技術の接続によって絶えず生成される位相的構造として捉える。この観点に立つならば、力もまた、存在主体があらかじめ所有している属性ではない。力は関係の中で生成され、接続の形式によって強められ、弱められ、あるいは失われる。

したがって、本論文の問いは「人間はどれほどの力を持っているか」ではない。問われるべきなのは、次の点である。

いかなる構造が人間に力を生成し、いかなる構造が人間を動かしながら、その根源的力動を奪うのか。

この問いは、現代社会における空虚、虚無、無力感、燃え尽き、評価依存、承認依存および未来喪失の問題と直結している。しかし、それらを個人の心理的障害へ還元することはできない。なぜなら、人間は実際には動き続けているからである。身体は動き、社会は作動し、情報は流通し、制度は維持されている。それにもかかわらず、生きているという実感が生じない。

ここには、運動と力動の差異がある。

運動とは、既存の経路に沿った位置の変化である。それに対して力動とは、それまで存在しなかった方向性、意味、接続および未来が生成されることである。本論文は、この差異を、必然性と偶然性、一般普遍性と個別具体性、デリバティブ空間と現実接地、ならびに言葉と身体の関係を通じて解明する。

第1章　力を失った一般普遍性

1.1 一般普遍性の機能

人間は、完全に孤立した個体として生きることはできない。人間の行為は、言語、共同体、制度、慣習、教育、宗教、法、科学、経済および歴史によって方向づけられている。これらの一般普遍的構造は、個々人を単に拘束するものではない。それらは、人間に未来像を与え、行為を可能にし、現在を超えて生きるための力を生成してきた。

例えば、教育は、現在の学習を将来の成長へ接続する。宗教は、個人の有限な生を超えた時間秩序を提示する。共同体は、個人的行為を世代的連続性へ接続する。労働は、現在の努力を将来の生活へ接続する。学問は、個別の知見を一般的な真理へ接続する。

したがって一般普遍性とは、単なる抽象概念ではない。それは、未来を可視化し、個別の行為に意味を与える力の生成装置であった。

1.2 一般普遍性の機能不全

しかし現代社会では、一般普遍性の制度的外形は維持されているにもかかわらず、その力生成機能が衰弱している。

学校は存在するが、学ぶことが未来へ接続されない。
企業は存在するが、働くことが自己の生へ接続されない。
市場は存在するが、価値が生活の実感へ接続されない。
評価は存在するが、承認が存在生成へ接続されない。
情報は増大するが、知ることが世界との関係を深めない。

ここでは、一般普遍性は消滅していない。むしろ、制度、規範、数値、資格、指標およびアルゴリズムとして過剰に存在している。問題は、それらが人間の内部に未来へのベクトルを生成できないことである。

この状態を、本論文は「力を失った一般普遍性」と呼ぶ。

1.3 運動はあるが、力動がない

現代人は身体を動かしている。起床し、食事をし、通勤し、労働し、消費し、情報を確認し、他者と通信する。しかし、それらの運動は、しばしば自己が生成する未来ではなく、既存のシステムが要求する必然性によって駆動されている。

ここでは、行為の外形は存在しても、その行為を未来へ接続する意味が存在しない。

したがって、現代的空虚は、活動の不足ではない。それは、活動が存在生成へ変換されない状態である。

運動はあるが、力動がない。
時間は経過するが、未来が生成されない。
行為はあるが、生きているという実感がない。

この区別によって、現代社会の無力感を個人の意欲不足としてではなく、社会的構造による力生成機能の喪失として理解することが可能になる。

第2章　必然性としての閉じた位相

2.1 必然性の再定義

本論文における必然性とは、論理学的必然性や自然法則上の必然性だけを意味しない。ここでの必然性とは、既存の構造によって未来の接続可能性があらかじめ限定され、行為が既定の経路へ収束する状態である。

「働かなければならない」
「評価されなければならない」
「適応しなければならない」
「成長しなければならない」
「情報を追わなければならない」

これらの命題は、それ自体が誤っているわけではない。しかし、それらが未来への唯一の経路として提示されるとき、人間の行為は閉じた位相へと組み込まれる。

2.2 閉じられた未来

未来は、本来的にはまだ存在していない。それは無であり、空であり、未確定な可能性である。しかし、一般普遍性は、その無としての未来に形を与える。

一般普遍性が力を持つとき、その形は人間に方向性を与える。しかし、一般普遍性が力を失うとき、未来の形は単なる予定、予測、管理、評価および計算へと変質する。

そのとき未来は、未知の可能性ではなく、現在の反復として現れる。

未来はある。
しかし、その未来はすでに決められている。
将来はある。
しかし、それは現在の延長にすぎない。

この状態では、人間は未来へ向かっているように見えながら、実際には現在の構造を再生産しているだけである。

2.3 必然性とデリバティブ空間

デリバティブ空間とは、将来の価値、意味、成果あるいは状態を現在へ先取りし、その将来像によって現在の行為を組織する空間である。

金融デリバティブは、将来の価格変動を現在の契約へ組み込む。同様に、社会的デリバティブ空間は、将来の地位、評価、成功、成長、幸福および安全を現在へ畳み込み、人間の行為を方向づける。

デリバティブ空間それ自体は否定されるべきではない。人間の言語、計画、教育、芸術および文化は、すべて将来を現在へ畳み込む構造を持つ。

問題は、その将来が現実との相互作用を失い、自己増殖する記号的価値へ変わることである。現実接地を失ったデリバティブ空間では、未来は開かれるのではなく、既存の評価体系によって先物化される。

このとき、人間は未来を生きるのではなく、未来として表示された現在の反復を生きる。

第3章　未来、言葉、意味

3.1 未来がなければ意味は成立しない

意味は、現在の対象の内部に固定的に存在しているのではない。意味は、対象、行為あるいは言葉が、未来の可能性と接続されることによって生成される。

例えば、種を土に植える行為は、現在の物理的動作だけを見れば、土を掘り、物体を埋める運動にすぎない。しかし、その種が芽を出し、成長する未来が現在に作用するとき、その行為は意味を持つ。

したがって、

意味とは、未来が現在を方向づけることによって生成される関係である。

未来が存在しないならば、行為は現在の出来事に閉じる。そこには因果的変化は存在しても、存在論的意味は生じない。

3.2 言葉は未来を発生させる

「東京へ行く」という言葉を考える。

この言葉は、現在の東京を記述するだけではない。「行く」という動詞は、現在地点と東京との間に、まだ実現していない関係を生成する。この文が発せられた瞬間、未来の東京が現在へ作用し始める。

荷物を準備する。
予定を調整する。
交通手段を調べる。
身体が移動を開始する。

したがって言葉は、すでに存在する未来を単に表象するのではない。言葉は、未確定な可能性の中から一つの方向性を切り出し、未来を発生させる。

言葉とは、無としての未来に方向を与える生成作用である。

3.3 言葉以前の未来と、言葉による未来

未来は、言葉によって完全に創造されるわけではない。自然、身体、他者および環境には、人間の言語以前の変化可能性が存在する。

しかし、人間にとって未来が意味を持つためには、その可能性が何らかの形で区別され、方向づけられなければならない。言葉は、この区別と方向づけを行う。

したがって未来と言葉の関係は、単純な原因と結果ではない。

未来の開放性が言葉を可能にし、
言葉が未来を構造化し、
構造化された未来が現在へ作用する。

この循環によって意味が生成される。

3.4 ナラティブの再定義

ナラティブは通常、出来事を時間的順序へ整理する物語として理解される。しかし生成の位相存在論では、ナラティブを過去の説明へ限定することはできない。

ナラティブとは、

未来へのベクトルを生成し、そのベクトルによって現在の出来事を意味ある関係へ組織する言語的構造である。

ナラティブは、現在を未来へ接続する。さらに、未来を現在へ畳み込む。したがってナラティブは、単なる物語ではなく、力を生成する時間的アーキテクチャである。

第4章　力、ベクトル、態度、位相

4.1 力の定義

以上の議論から、本論文における力は次のように定義される。

力とは、未来が現在に作用し、言語によって方向づけられ、身体的行為を通じて現実へ接地することで生成される存在論的力動である。

この力は主体の内部に蓄積された実体ではない。力は、自己と自己以外との接続において生じる。

したがって力は、所有ではなく生成である。

4.2 ベクトルとしての力

未来が現在へ作用するとき、現在には方向性が生じる。この方向性を、ベクトルと呼ぶことができる。

ベクトルは、単なる空間的方向ではない。それは、現在がどの未来へ向かって組織されているかを示す存在論的方向である。

「東京へ行く」という言葉は、東京という場所の情報ではなく、現在の自己から未来の東京へ向かうベクトルを生成する。

したがって、

力とは未来への方向性であり、方向性を持った力がベクトルである。

4.3 態度としての力

言葉によって生成されたベクトルが身体に保持されるとき、それは態度となる。

態度は、単なる心理的意見や姿勢ではない。態度とは、身体が未来への方向性を保持し、その方向性に応じて世界との接続可能性を変化させている状態である。

したがって、

態度とは、未来へのベクトルが身体化された位相である。

同じ場所にいても、態度が異なれば、見えるもの、接続する他者、選択される行為、意味を持つ出来事が異なる。態度の変化は、世界の認識内容だけでなく、世界との接続構造そのものを変える。

4.4 位相としての力

位相とは、何が何と接続可能であり、どの関係が連続し、どの境界が維持あるいは変形されるかを規定する構造である。

生成の位相存在論において、存在は位相的構造として生成される。したがって、力が変化するとは、単にエネルギー量が変わることではない。それは、接続可能性の構造が変化することである。

未来へのベクトルが変われば、現在の意味が変わる。
意味が変われば、態度が変わる。
態度が変われば、接続可能性が変わる。
接続可能性が変われば、存在の位相が変わる。

この意味で、

力、ベクトル、態度、位相は、同一の存在生成を異なる水準から記述する概念である。

第5章　根源的力動の喪失

5.1 生きている実感の欠如

人間が身体的に活動しているにもかかわらず、生きている実感を持たないという現象は、力の欠如として理解できる。

ただし、ここで失われているのは、生理学的エネルギーではない。失われているのは、自己の現在が未確定な未来へ接続され、その接続によって自らが変化し得るという実感である。

生きている実感は、単なる快楽や満足ではない。それは、自分の行為が自分自身の知らない未来へ接続されているという感覚である。

5.2 自己以前性と人間以前性

自己は、完成した主体として最初から存在するのではない。自己は、自らの行為、他者との関係、自然との相互作用、失敗、偶然、遅延および予測不可能な結果を通じて生成される。

したがって、自己の根源には、自己によって完全には把握されない「自己以前性」が存在する。また、人間の言語、制度および社会的分類以前には、身体、自然、感覚および環境との相互作用としての「人間以前性」が存在する。

根源的力動とは、自己がこの自己以前性および人間以前性へ接続し、自らの既存の定義を超えて生成される力である。

5.3 自己外部化の限界

近代以降、人間は自己を、成果、作品、資格、評価、記録、貨幣、肩書、データおよび社会的承認へ外部化してきた。自己外部化は、人間が他者や社会と接続するために必要である。

しかし、外部化された表象が自己そのものとみなされるとき、自己は外部の評価体系に依存する。外部化された自己が承認されなければ、自分の存在自体が無効であるかのように感じられる。この状態では、自己外部化は力を生成するのではなく、力を外部へ委ねる。根源的力動の回復は、自己を内面へ閉じ込めることではない。それは、外部化された自己と、外部化し尽くすことのできない自己以前性との間に、再びインターフェイスを生成することである。

第6章　必然性から偶然性への位相変換

6.1 偶然性の再定義

偶然性は、通常、予測不能な出来事や統計的な不確定性として理解される。しかし本論文において偶然性とは、閉じた必然的構造の内部に、それまで存在しなかった接続可能性が生成されることである。

偶然性は、単に外から到来する出来事ではない。偶然性は、自己が言葉を発し、身体を動かし、現実と相互作用することによって生成される場合がある。

偶然性とは、既存の選択肢から一つを選ぶことではなく、それまで選択肢として存在しなかった接続を発生させることである。

6.2 自己によるナラティブの生成

力を失った一般普遍性の内部では、自己は社会から与えられた未来を反復する。しかし、その未来が自己の力動へ変換されないとき、自己は自らの個別具体的な言葉によって未来を再構成しなければならない。

ここでいう自己によるナラティブは、恣意的な自己物語や自己肯定ではない。それは、現実との相互作用に耐え得る未来の仮説である。

自己は言葉によって未来を提示する。
身体は、その未来に向けて行為する。
現実は、その行為を抵抗、修正、遅延あるいは変形する。
その結果、自己は当初の自己理解を超えて変化する。

この循環によって、ナラティブは現実へ接地する。

6.3 位相変換

必然性から偶然性への移行は、同じ位相内での選択ではない。それは、接続構造そのものが変化する位相変換である。

位相変換前には、現在から未来への経路は、既存制度によって限定されている。位相変換後には、個別具体的な言葉と実践を通じて、新たな経路が生成される。

したがって、位相変換とは、

既存の一般普遍性によって閉じられた未来を、個別具体的な実践によって再び未確定な可能性へ開くことである。

6.4 個別具体的普遍性

個別具体的な実践は、単なる私的行為にとどまらない。ある個別具体的な行為が、他者、自然、場所、歴史および社会との接続を通じて、他の人間にも開かれた意味を生成するとき、それは個別具体的普遍性となる。

一般普遍性が上から与えられる抽象的秩序であるならば、個別具体的普遍性は、一つの現実的実践から生成され、他者へ接続可能となる普遍性である。

新しい一般普遍性は、抽象から個別へ降りてくるだけではない。個別具体的な偶然性が反復、共有、翻訳および変形されることで、下から生成される。

第7章　現実接地と力の生成

7.1 言葉だけでは力は完成しない

言葉は未来を発生させる。しかし、言葉だけでは力動は完成しない。

「東京へ行く」と語ることによって、未来へのベクトルは生成される。しかし、身体が移動せず、現実の抵抗や条件と接触しないならば、その未来は言語的デリバティブ空間にとどまる。

言葉は未来を開く。
身体は未来へ向かう。
現実は未来を変形する。

この三者の接続によって力が生成される。

7.2 身体だけでは力は生成されない

反対に、身体的運動だけでも根源的力動は生成されない。

既定の労働、反復的移動、習慣的消費および自動化された操作は、身体を動かす。しかし、それらが自己の未来へ接続されなければ、運動は必然性の再生産にとどまる。

したがって、

言葉のない身体は必然に従って動き、身体のない言葉はデリバティブ空間を漂う。

言葉と身体が現実において接続するとき、行為は単なる運動から存在生成へ変化する。

7.3 現実接地の再定義

現実接地とは、記号が既存の対象を指示することだけではない。

生成の位相存在論における現実接地とは、

言葉によって構造化された未来が、身体的行為を通じて自己以外の現実と接触し、その抵抗と変形を受けながら、新たな存在関係を生成する過程である。

現実接地において重要なのは、言葉どおりに未来が実現することではない。むしろ、言葉と現実の差異によって、予測されなかった自己および未来が生成されることである。

この差異が偶然性を生み、偶然性が根源的力動を回復させる。

第8章　芸術と力の生成

8.1 芸術は表現ではなく条件設計である

本論文の観点から、芸術は内面の感情を外部へ表現する行為だけではない。また、美的対象を制作する行為だけでもない。

芸術とは、

既存の必然的構造の内部に、それまで存在しなかった偶然的接続が発生する条件を設計する実践である。

芸術は、完成された意味を伝達するのではない。芸術は、自己、他者、場所、物質、自然、技術および時間の関係を再配置し、新しい意味が生成される位相をつくる。

8.2 逆問題芸術

逆問題芸術は、既知の原因から結果を計算するのではなく、現れている断片、痕跡、表面、アウトラインあるいはインターフェイスから、まだ確定していない内部構造を生成する。

この構造では、意味はあらかじめ与えられない。受け手は、現実との接触を通じて、原因、関係および未来を遡及的に構成する。

したがって逆問題芸術は、必然性を説明するのではなく、偶然性を生成する。

8.3 Web Installation とインターフェイス存在論

Web Installation は、ウェブを作品情報の掲載場所としてではなく、現実空間、身体、制度、通信、画面、場所および未来を接続するインターフェイスとして扱う。

そこでは作品は固定された対象ではない。アクセス、移動、閲覧、滞在、誤読、遅延、通信および身体的経験の連鎖によって、作品の存在が生成される。

インターフェイスは、二つの既存領域を接続する中立的媒介ではない。インターフェイスは、接続される両者を変化させ、新しい位相を生成する。

この意味で、芸術的インターフェイスは力の生成装置である。

8.4 「生きている」という実感

芸術体験における「生きている」という実感は、強い感情や刺激の量によって生じるのではない。それは、自己の既存の位相が変化し、自分が知らなかった自己および未来へ接続したときに生じる。

したがって芸術の力とは、鑑賞者を特定の方向へ説得する力ではない。

芸術の力とは、

鑑賞者が、自らの必然性の内部に偶然性を生成し、自分の知らない自分と出会う可能性を開く力である。

第9章　人工知能と言語デリバティブ空間

9.1 AIによる未来の言語化

生成AIは、既存の情報から、まだ存在しない文章、画像、概念および可能性を生成する。その意味でAIは、未来を言語的に先取りするデリバティブ装置である。

AIは、現実化していない可能性を、もっともらしい言語形式として現在へ提示する。この機能は、人間の想像、設計、研究および創作を拡張し得る。

しかし、AIが生成する未来が現実との相互作用を欠くとき、その言語は自己増殖するデリバティブ空間となる。

9.2 ハルシネーションと力

AIのハルシネーションは、存在しないものを存在するかのように提示する現象である。しかし、その問題は、単に情報が誤っていることに限られない。

より根源的には、言語的未来が現実へ接地されないまま、意味と権威を獲得することである。

人間がAIの言葉を、自らの身体的実践や現実との接触を経ずに受け入れるならば、AIは人間に力を与えるのではなく、人間の未来生成を代行する。その結果、人間は行為の主体であるように見えながら、AIが生成した必然性に従属する。

9.3 AI時代の力の倫理

AI時代に必要なのは、AIが正しい未来を提示することだけではない。重要なのは、人間がAIの生成物を、自己の個別具体的な現実へ接地し、そこから新しい偶然性を生成できることである。

AIは、未来の候補を提示することができる。
しかし、その未来へ身体を賭け、現実との関係を引き受けることは、人間の側に残される。

したがってAIの倫理とは、誤情報の防止だけでなく、人間の未来生成能力を奪わないインターフェイスを設計することである。

第10章　生成の位相存在論における力の体系

以上を統合すると、力の生成は次の循環として記述できる。

無としての未来
→ 言葉による区別
→ ナラティブの生成
→ 意味の発生
→ ベクトルの形成
→ 態度としての身体化
→ 行為
→ 現実との接触
→ 抵抗・変形・遅延
→ 偶然性の生成
→ 自己の位相変換
→ 新たな未来

この循環は閉じた円環ではない。現実との接触によって、出発点には還元できない差異が生成される。その意味で、この循環は螺旋的であり、非対称的であり、不可逆的である。

10.1 力の第一命題

力は、主体が所有する実体ではなく、未来、言語、身体および現実の接続によって生成される。

10.2 力の第二命題

意味は、未来が現在へ作用することによって生じる方向性である。

10.3 力の第三命題

ナラティブは、未来へのベクトルを生成し、現在の行為を組織する言語的アーキテクチャである。

10.4 力の第四命題

態度は、未来へのベクトルが身体に保持された位相である。

10.5 力の第五命題

現実接地とは、言語的に生成された未来が、自己以外の現実との相互作用を通じて変形される過程である。

10.6 力の第六命題

必然性とは、未来の接続可能性が既存構造によって閉じられた位相である。

10.7 力の第七命題

偶然性とは、閉じた必然性の内部に、それまで存在しなかった接続可能性が生成されることである。

10.8 力の第八命題

芸術とは、必然性から偶然性への位相変換が生じる条件を設計する実践である。

結論

本論文は、「力」を、人間が内部に所有する能力、意志、活力あるいはエネルギーとしてではなく、未来、言葉、意味、身体、行為および現実の接続によって生成される存在論的力動として再定義した。

現代社会の問題は、人間が身体を動かさなくなったことではない。むしろ人間は、かつてないほど多数の制度、情報、評価、指標およびアルゴリズムによって動かされている。しかし、その運動は、人間を未確定な未来へ接続せず、既存の現在を反復させる必然性へと閉じ込める。

この状態において、一般普遍性は制度として存在しながら、人間に根源的な力動を生成できない。未来は提示されるが、それは自己の未来ではない。意味は流通するが、それは自己の行為を変化させない。ナラティブは存在するが、それは自己を自分の知らない未来へ連れ出さない。

したがって必要なのは、既存の一般普遍性を単純に破壊することでも、過去の共同体へ回帰することでもない。必要なのは、自己が個別具体的な言葉と身体的実践を通じて、閉じた必然性の内部に偶然性を生成することである。

言葉は、無としての未来に方向を与える。
未来は、意味として現在に作用する。
意味は、ベクトルとして行為を方向づける。
ベクトルは、態度として身体化される。
身体は、現実と接触する。
現実は、言葉どおりにはならない。
その差異から、偶然性が生じる。
偶然性によって、自己の位相が変化する。

この位相変換こそが、根源的力動の回復である。

したがって、本論文の最終命題は次のように表現できる。

生きるとは、既存の必然性に従って運動することではない。生きるとは、必然性の内部に偶然性を生成し、その偶然性を通じて、自分の知らない自己と未確定な未来へ接続することである。

そして芸術とは、その接続が生じる条件を設計する実践である。

参考文献

美学者母『生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——』Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

美学者母『自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——』Research Memorandum, Version 0.9, 2026.

美学者母『言語デリバティブ論——人工知能のハルシネーションにおける逆問題芸術とレバレッジ構造——』Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

美学者母「Web Art Declaration」2010.

美学者母「スマートアート宣言」2014.

美学者母「量子論美術宣言」2016.

美学者母「デリバティブアート宣言」2018.

美学者母「分散型自律芸術宣言」2022.

Aristotle. Metaphysics.

Aristotle. Physics.

Bergson, Henri. Creative Evolution.

Deleuze, Gilles. Difference and Repetition.

Heidegger, Martin. Being and Time.

Heidegger, Martin. “The Question Concerning Technology.”

Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception.

Whitehead, Alfred North. Process and Reality.

Wittgenstein, Ludwig. Philosophical Investigations.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。